

学界の動向

第23回日本喉頭科学会総会・学術講演会報告

原 瀨 保 明*

第23回日本喉頭科学会総会・学術講演会は旭川医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室の担当で平成23年4月21日(木)・22日(金)の両日、旭川グランドホテル(旭川市)で開催されました。日本喉頭科学会は喉頭科学の研鑽と向上を目的として1989年に創設された学会です。喉頭は呼吸、嚥下といった生命の維持に直結する機能を担うばかりではなく、コミュニケーションツールである音声をつくり出す臓器でもあります。比較的歴史の浅い学会ではありますが、高齢化のなかで生活の質を保つことが医療の目標とされる現在、耳鼻咽喉科領域のなかでも特に喉頭科学の果たす役割が急速に大きくなりつつあります。また、1996年には海野徳二名誉教授が本学会の第8回大会を主催しており、本学にゆかりのある学会でもあります。今回、このような名誉ある機会を与えて頂いたことに対し、関係各位の皆様にご心より感謝申し上げます。

我々の学会準備が佳境にさしかかっていた3月11日、予想をはるかに超えた大地震によって東北地方は壊滅的な被害を受けました。そのために、東北および関東地方を中心に開催を中止もしくは延期した全国学会がたくさんありました。我々も本学会の開催を非常に悩みましたが、中島 格日本喉頭科学会理事長(久留米大教授)や理事会のご助言、ご賛同のもと、「被害を受けなかった地域は、被害を受けた地域へできる限りの援助をしつつ、会員全員が従来以上に医学、医療の発展により一層努力し、学会の活動を高めることが、日本全体の活力を保ち、ひいては被災地、日本の復興につながる」という理念にしたがって、本学会についてはほぼ予定通りの開催を決行いたしました。大震災から1ヶ月あまりでの開催という厳しい状況の



なかで、臨床研修医ならびに医学部学生17名、海外からの留学生1名を含む332名の参加をいただきました。被災地への援助という趣旨から、学会会期中に募金活動を行い、被災した東北地方の耳鼻咽喉科施設への救援基金として国際耳鼻咽喉科学会振興会(SPIO)を介して寄付をいたしました。また、被災した地域から参加していただいた先生には、学会参加をご招待とさせていただきます。残念ながら、米国ヴァンダービルト大学のDavid L Zelear教授が不参加となったため、予定していた特別講演「Novel techniques for reanimation of the paralyzed larynx」は中止となってしまいました。しかし、幸いにも震災を理由にした一般演題の取り下げは1題もありませんでした。本学会の

*旭川医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座



メインテーマは「北の彩都に集う」でしたが、学会場で被災された地域からの参加者との再会を喜ぶ姿が多数見受けられたことは主催者としてこの上ない喜びであり、参加いただいた先生には心より感謝申し上げます。

会員の皆様のご協力により、学術講演会の内容も非常に充実したものになりました。シンポジウム1は大森孝一教授（福島県立医科大学）、兵頭政光教授（高知大学）の御司会で、「新しい喉頭麻痺治療への translational research」と題して、近い将来に臨床応用が期待される喉頭麻痺に対する新しい検査法や治療法について、わかりやすく解説していただきました。牧山 清先生（日本大学）からは声帯振動の評価のための高速撮影検査装置の応用について御講演がありました。喉頭麻痺の症例では声帯の基本振動数が不規則になるため、通常のスロボスコーピーでの声帯振動の観察が難しくなります。また、発声時の声門間隙を外科的に小さくしているにもかかわらず、音声思いのほか改善しない症例も見られます。高速撮影装置は1秒間に2000フレームの撮影が可能であり、喉頭麻痺症例の発声時声帯振動を直接観察することができます。高速撮影装置から得られる声帯振動の動画を解析することで、喉頭麻痺症例の術後のより詳細な評価が可能となることを示していただきました。梅野博仁先生（久留米大学）には、声帯内脂肪注入術における注入脂肪の自然吸収を抑制するための基礎研究について御講演いただきました。声帯内脂肪注入術は侵襲が小さく安全性の高い手術ですが、時間経過とともに注入した脂肪組織の自然吸収がおり、徐々に治療効果が減弱してしまうという問題をかかえています。この問題に対する解決策として、実験動物レベルではありますが、注入脂肪に肝細胞増殖因子を混入させることによ

って、注入後の脂肪吸収を抑制する効果が長期間持続する可能性が示されました。本吉和美先生（高松赤十字病院）には、末梢神経の再生を促進する神経栄養因子の局所投与をめざした新しいドラッグデリバリーシステムに関する研究をご紹介いただきました。顔面神経麻痺症例に顔面神経減荷術をおこなう場合、塩基性線維芽細胞増殖因子を含むゼラチンハイドロゲルを顔面神経周囲に留置する試みは、既に臨床応用されています。今後は、喉頭麻痺に対してもその臨床応用が期待され、障害された反回神経の再生を促進させる新しい治療法となる可能性が示唆されました。金丸眞一先生（北野病院）には、間葉系幹細胞が損傷された内喉頭筋を形態学的のみならず機能的にも再生させることをご紹介いただきました。幹細胞を用いた再生医療があらゆる分野における最新のトピックスとなっていますが、内喉頭筋が障害される喉頭疾患の治療にも応用可能であることを示していただきました。國部 勇先生（旭川医科大学）には、機能的電気刺激装置を用いた麻痺声帯の再運動化に関する基礎研究について御講演いただきました。埋込型の電気刺激装置を用いて内喉頭筋を直接電気刺激することで声帯運動を回復させることは、動物実験での有効性と安全性がすでに確認されており、喉頭麻痺に対する新しい治療法として臨床応用の段階にあることが示されました。いずれの研究も、従来の検査法や治療法では対応できなかった喉頭麻痺に関する多くの臨床的な問題を解決する糸口になるものと確信しております。

シンポジウム2は塩谷彰浩教授（防衛医科大学校）、渡嘉敷亮二教授（東京医科大学）の御司会で、「音声外科手術のコツと pitfall」と題して、各シンポジストから若手の先生が手術技術を向上させるための「コツ」を分かりやすく解説していただきました。齋藤康一郎先生（慶応義塾大学）には音声外科の基本であるラリಂಗマイクローサージャリーについてご講演いただきました。喉頭展開の体位、使用する鉗子、操作のコツ、マイクロデブリッターなどの手術支援機器の使用法についてわかりやすく説明していただきました。田村悦代先生（東海大学医学部附属八王子病院）には声帯内脂肪注入術を解説していただきました。通常の声帯内脂肪注入術では腹部皮下から脂肪組織を採取する方法が一般的ですが、田村先生は口腔内から頬部脂肪体を採取する方法をおこなっており、その利点、注入

に用いる機器、注入箇所のポイントを分かりやすく示していただきました。採取した脂肪組織の注入には、一定速度でゆっくり注入することが可能な電導注入器が有用であることを強調されていました。梅崎俊郎先生（九州大学）には、甲状軟骨形成術について御講演いただきました。梅崎先生が使用されているシリコンブロックは後方の部分が大きく、挿入によって披裂軟骨を内転させることができる特殊な形状になっており、披裂軟骨内転術を併施しなくても十分な音声改善が認められることを示されました。手術手技的な部分では開窓部位の内軟骨膜を保存することが大切であることを強調しておられました。片田彰博先生（旭川医科大学）には、披裂軟骨内転術について解説していただきました。披裂軟骨内転術の効果を確認するためには術中に発声してもらうことが必須ですが、披裂軟骨内転術は術中に喉頭を捻転させるため、患者の苦痛を伴います。披裂軟骨内転術成功のポイントは、術中の麻酔方法と甲状軟骨翼の鉗除による披裂軟骨へのアプローチ法であることを実際の手術ビデオの中で分かりやすく示していただきました。中村一博先生（東京医科大学八王子医療センター）には、内転型痙攣性発声障害に対する甲状披裂筋切除術と甲状軟骨形成術2型の比較について御講演いただきました。単一施設で痙攣性発声障害の手術症例を重ねることは大変難しいと思いますが、非常に多くの症例を手術されており、それぞれの術式の長所と短所を分かりやすく解説していただきました。このシンポジウムで示された手術のコツや pitfall が音声外科を志す若い先生への“take home message”となり、より多くの音声外科手術がおこなわれるようになれば幸いです。

ランチオンセミナーの4題は、山中 昇教授（和歌山県立医科大学）による「耳鼻咽喉科感染症に対する治療最前線」、佃 守教授（横浜市立大学）による「頭頸部がん化学療法の現況と展望」、林 達哉先生（旭川医科大学）による「急性喉頭蓋炎の危機管理」、大澤 勲先生（順天堂大学腎臓内科）による「遺伝性血管性浮腫とその類縁疾患」が演じられました。喉頭科学とも関連の深い最新のトピックスに関する話題を提供していただき、耳鼻咽喉科医として大变得るものが多い講演であったことに心より感謝申し上げます。

一般演題は全国83の施設から120題の登録をいただきました。学会期間中は例年より気温が低く、会場の外に出にくい状況も幸いたたためか、各会場ともたくさんのお聴衆の中でのすばらしい発表と活発な討論が展開されており、主催者としてはうれしい限りでした。若い先生の基礎研究離れが指摘される中で、12題の基礎研究演題の登録をいただき興味ある話題を提供していただいたことにも感謝申し上げます。本学会が日本の喉頭科学発展に大きく寄与していることを改めて痛感いたしました。

今回の学会の運営は、会場の設営や映写機器の準備以外はすべて教室のスタッフが担当いたしました。なんとか無事成功裡に終了することができました。本学会の開催にご協力をいただいた旭川医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科同門会ならびに旭川医師会の皆様にご挨拶をいただいた吉田学長、ご協力をいただいた本学関係者の皆様にも心から感謝いたします。本当にありがとうございました。



第23回 日本喉頭科学会総会・学術講演会 2011年4月22日 於：旭川ランドホテル